

●風のたより

第7号

2015年10月1日発行

まちなか相談室「風の舎」: 〒854-0081 諫早市栄田町6-30/0957-47-8090

事務所・問い合わせ先: 〒852-8046 長崎市柳谷町39-6/090-4987-0770

風の舎 春夏秋冬 百花斉放



風の舎は、コミュニティの居場所をめざして2012年春に開設以来、
幾たびかの季節がめぐり、
さまざまな人たちがそれぞれの花を咲かせています。

<目次>

精神障がい者の豊かな世界	2
問題を抱えながらも～村島和明～	2
「風の舎」での会話の中で～秋月泰介～	3
インタビューふたり～野口浩介・吉野大輔～	4

巣立って行った不登校生	6
-------------------	---

学生たちが経験した「風の舎」 ～平山修二・一ノ瀬翔太・花田萌・井原歩～	8
--	---

ピアサポーターふたり～立野雄三・富永遼子～	10
-----------------------------	----

スタッフの声	12
--------------	----

フォトアルバム	14
---------------	----



問題を抱えながらも 村島 和明

私が風の舎に来はじめたのは去年の4月頃からでした。

それまで私は足を骨折して入院していました。

だんだん回復するにつれて、退院後どのように生活していったよいかという現実問題が私を不安にさせました。それまでの生活は、独りの世界に入り込み、ただ布団の中でじっとしている、というものでした。そうしているしかなかったのです。だから退院しても、また同じことが繰り返されるのではと不安になりました。

ピーさんとはすでに3年前に知り合っていました。

そんなピーさんが私の入院中に何度も面談に来てくれました。その面談の中で、様々な思い、悩み、葛藤を打明けることにより、いろんな思いが少しだけ整理され「退院したらとりあえず風の舎に週に1回から2回くらいお世話になる」という結論に至りました。

そして、いま現在、週1回程度、風の舎に通い、ピーさんやスタッフの皆さんにお世話になっています。風の舎に来ることは、はじめ、自分にとって時間潰しのようなものでした。

ピーさんにそのことをそのまま話すと、「まあ、人生は死ぬまでの時間潰しのようなもんだわな～」という言葉が返ってきました。その言葉が私の心を少し軽くしてくれました。

でも私にとって問題はそれだけではありませんでした。

それは自分の心の闇(悪魔)を抱えたまま生きていくのはつらい、むしろ生きていていいのかという問題でした。その悪魔を払いたいのだけれど、できません。

ですから私の「自己病名」は「悪魔払い常に失敗型」です。

私は今は精神的に安定している(?)、落ち着いている(?)ように見えますが、内心は乱れ、すさみ、病んでいます。常に、否定的な考えや言葉、他人を傷つける言葉で埋め尽くされています。

そのことを話すと、ピーさんは「それは人間存在の最も深い層の根本的な矛盾で、向き合わなければならないが、おいそれと解決できるわけではない。その矛盾から精神の病や症状という第2層の苦しみが生まれ、さらにその上に現実生活の不安という第1層の問題がある。今は第2層の症状は落ち着い

ているから、第3層の問題を抱えながらも、それを一時棚上げして、現実の暮らしをどうするかを考えることができるんじゃないか」と言ってくれました。それ以来、自分の問題を第1層、第2層、第3層に分けることで、ある意味開き直って、こうやって生きています。



ある日、部屋で音楽を聴いていると、そのメロディと歌詞につられてか、自分もいまの気持ちをふと表現したくなったのです。

それが「詩」という形になりました。

「べてるin諫早2014」で自作のレザークラフトを販売する村島さん(左端)

これが僕の声で
誰でもない僕。
やけに整えられた部屋で
僕は孤独。
キレイな鉢を与えられた
一匹で泳ぐ金魚。
ほこりかぶったギターに、食べかけのキャンディ
みんな一緒なのかな？
一曲リピートされたお気に入りの曲
歌って、踊って、マネしたりしてみても満たされないのもわかっているから
それでも追うよ、追うよ、前を、前を...

真っ白い汚れ一つない壁に吸いこまれるように僕は手をあてる
まるで一つになるように...。
トウモロコシがあげる湯気の先に見えるのは
所々、予定が埋められたカレンダー
灯りっぱなしの電球がてらしだす廊下
そのどれもがありがたのままですばらしい。
僕もそうでありたい。
そこにおさえつけた何かがあるとしても
顔が笑みであふれているとしたら
僕はありがたのままを選びたい。
僕は僕でありたいから。

村島 和明



「風の舎」での会話の中で 秋月 泰介

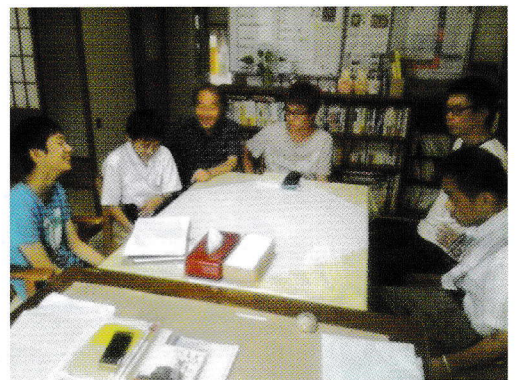
わからないことは、わからないままでいい
できないことは、できないままでいい

かつてできていたことが今はできない
いろんなことを知っていても、それを用いることができない
はがゆくて地団駄ふむ思いがする

けれど、それが正直な姿
それが自分なのだから

昔にくらべて
生活の幅が狭くなった
生きる幅が狭くなった
人生を放棄したいとしょっちゅう思う
死を望む心もある

しかし、人生は放棄できない
それなりに生きていかなければならない
こうなるより他はなかった自分を「宿命」として受け取り
自分に正直に生きれば、それでいい



メンズトークを楽しむ
ある火曜日の秋月さん(右前)

インタビューふたり

その1：野口浩介さん 特効薬は「話すこと」

—自己紹介を「自己病名」でお願いできますか

「統合失調症ガラスのハート型死にたいけれど生きてるタイプ」です。
問題にぶつかると直ぐ心が壊れるんです。これまで何万回も「死にたい」と言い続けてきました。

—いまも、幻聴のこと、仕事のこと、子育てのこと、と問題だらけですね。

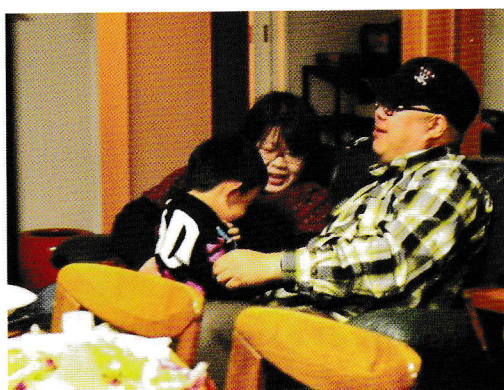
上の子(Yくん)が保育園の年長組、下の子(Rくん)が1歳半。
Yくんは感情のコントロールがうまくできなくて…。食が細くて、夕飯を残すことも多い。
奥さんは仕事から疲れて帰ってきて、そういうYくんを見ると強い調子で叱る。
Yくんは泣き出す。これは一例ですが、毎日何か問題が起こります。
ぼくの調子が良い時にはゆっくり話したり、一緒に風呂に入ったりしてYくんも落ち着きを取り戻します。
しかし調子が悪いとうまく対応できず、悪循環に陥ります。ぼくが奥さんのやり方に不満をつのらせ、
そんな自分を責め、幻聴が始まり、自傷行為に走る。そういう自分の姿を子どもたちには見せられない
と思い、自分の部屋に閉じこもるか、家から飛び出してしまう。
そんな時ですね、「もう死にたい」と思うのは。

—でも、生きてる…

YくんとRくんが居るからです。幻聴もRくんの声で聞こえることがあるんです。
Rくんがわんわん泣いている。その泣き声で目が覚めてRくんを見るとぐっすり眠っている。
ああ幻聴だったと安心する反面、それから眠れなくなってしまうのが辛い。

—病気を抱えながら、いろんな症状に悩まされながら、子育てによく奮闘しているよね。

以前は病気の苦労ばかりだったけれど今は「子育て」という当たり前の苦労をするようになりました。



「べてるin諫早2014」の前夜の食事会で家族と共に

—でも、それと関連して症状が出てくる、 その時にはどんな風に対処しているの？

病院に行く時もあるけれど、ぼくの特効薬は「話すこと」
なんです。こうして「風の舎」で話すことによって、ずいぶん
落ち着くことも多いです。
電話で相談予約をするだけでも少し平静になります。

—だから当事者の「話す場」、「語る場」をつくりたいと 思っているのね。

インタビューふたり

その2：吉野大輔さん 当事者に相談してください

—就労支援事業所B型への通所を始められましたね。

3月半ば頃からで、約2か月になります。[注：インタビューは5月半ば]
陶芸で器づくりをしています。

はじめは早く体を慣らすために週6日でしたが、
今は週5日です。

※9月に入り径40cmの大皿に挑戦



ピアカウンセリング
公開セミナーにて(左)

—新しい出立ですか？

「新しい一歩」にならないようなスタートを切りたいと思いました。
過去を断ち切ったスタートではなく、過去のすべてを含めての今だし、これまで色んな寄り道を
してきた、その延長線上でのスタートですから。

—風の舎も寄り道の一つ？

風の舎には押しつけがありません。その分、「遊び」があります。
機械がスムーズに動くための「遊び」ですね。それが生まれたのが、ぼくにとっては大きかった。

—作業所での毎日、疲れが出ていませんか？

ぼくは頑張りすぎるんで、みんなが心配してくれますが、仲間の当事者と一緒に居ると、
あまり疲れません。それはみんなが自分の弱さを自覚しているから。
「私はこれができません」と言い合いながら、たがいにできない所を補っています。

—疲れるのはどんな時？

指導員やワーカーさんが一生懸命「ケアしよう」としてくれる時ですね。
一般的な助言をしてくれたり、教科書どおりの指導をしてくれたり、善意で励ましてくれたりする
のですが、必ずしもぼくのニーズに合っているわけではない。
でも、「よいケアをした」という満足感が必要だろうから、こちらは「ありがたい」「助かります」という
顔をしなければならない。ほんとに気をつかい、気疲れします。何に困っているか、どういうケアを
必要としているか、当事者に相談してくるといいのですが…。

—「相談するワーカー」ですね。

福祉の仕事をしている人達の中に「弱さや病気が役に立つ」という発想がなく、
「強い者がその強さで弱い者をサポートする」のが当たり前になっているような気がします。

巣立って行った不登校生

この春、二人の不登校生が風の舎から巣立って行った。



一人は、小学5年生から6年生までの2年間、学校に行かなかったH. K. さん。その理由は、強いて言えば、学校に行く意味・目的を見い出せなかったから。彼女は呟く「学校に行っても集中して勉強するわけでもなく、わいわいがやがやなんとなく一日が過ぎて、疲れて帰って来るだけ」。風の舎に来はじめたのは、6年生になった昨年4月、毎週月曜日にお母さんと一緒に来訪。約一時間、カウンセリングというより、時にはコミュニティサービスの学生もまじえて、とりとめのないおしゃべりをした。

ある日、彼女のすごい才能の片鱗に触れた。国語の教科書を音読してもらったところ、その声の深い豊潤な響きと感情のこもった読み方に魅了された。聞いていたスタッフも「鳥肌が立った」。その後、何度か詩や絵本の朗読をしてもらった。彼女の夢はこの才能を生かして声優になること。その動機は、「アニメを見ていると、声優の声によって登場人物にいのちが吹き込まれるように思える。その声を聞いて、私は元気になる。自分の声で誰かを元気にすることができれば...」。学校では2学期から、風の舎の連絡をとりながら、登校する目的を与えるために色々な試みがなされた。読書好きの彼女を図書委員に加えたり、特別支援学級の子どもたちに絵本の読み聞かせをしたり、等。しかし、それで登校するようになったわけではなく、行事への参加を除いて、3学期半ばの2月まで不登校は続いた。

「学校には行けなの？それとも行かないの？」と尋ねると、即座に答えが返ってきた―「行かない」。

こんな哲学的(?)会話をかわしたこともある。

「わたし運動会がきらい。運動会なんてなぜあるんだろう？」

「その前にそもそも学校なんて、なぜあるんだろう？」

「そもそもと言うのなら、私はなぜいるのだろう？」

学校に行くのが当然と考え、その意味を問うことをしない世間の常識に疑問符をつけながら、

彼女は学校に対しては「行かない」と明確な意思表示をしなかった。

はっきり伝えた場合の教師達の困惑を思いはかったからである。

だから「優柔不断な子と思われたかもしれない...」と彼女は苦笑する。

そんな彼女に対してスタッフからは「正直な気持ちを表せば一時的には周囲と摩擦が生じるかもしれないが長い目で見れば必ず伝わる」とエールの声。

3月末、「不登校の2年間をふりかえって良かったことは？」と尋ねた。

彼女は「自分で勉強する習慣がついた」と答え、「でも、中学生になれば自分だけで勉強するのは難しくなると思う。だから中学校には行く」と『登校宣言』をした。

その宣言どおり、4月からは休まず通学している。

「まるで魔法にかかったみたい」とお母さんは笑った。



「風の舎」の春休み読書会で絵本を読んでもくれたH.Kさん(右奥)

もう一人は、中学1年生だったN・K君。

2学期から不登校になり、諫早市少年センターの個別相談がきっかけで風の舎に来るようになった。最初は昨年10月下旬、少年センターの「ふれあい学校」へ行ったがどうしても中に入れない。個別相談で紹介された風の舎に行ってみようということで、お母さんに連れて来られた。K君を一人残してお母さんが帰られると、幼児のように泣き出した。玄関先で肩を抱えて横に座ること約1時間、ようやく泣き止んで部屋に入り、畳の上で横になってしばらく眠った。これがK君との最初の出会いだった。

それから毎日のように風の舎に来るようになった。学習支援の必要もあったが、まず心がけたのは「安心できる場」の提供であった。やがてぽつりぽつりと自分のことを話し出した。いじめを受けたこと、学校や学校のような場所(例えば少年センター)に行くとその時のみじめな経験がフラッシュバックして体がすくみ、動けなくなること、そんな話をすると、当初はすぐに泣き出した。ある日、いじめられた相手に対する感情を爆発させた。「あんなやつ、死んでしまえばいい。殺せるなら殺してやりたい!」。それをそのまま受け止めて「自分をいじめた相手など死ねばいい、殺してやりたい、という気持ちなんだね」と言葉を返した。自分の正直な気持ちを、どんなネガティブな感情でも、受け止めてもらえることに力を得たのか、何日か後に嬉しそうに話しかけてきた。「お父さんに初めて本音を伝えることができた。お父さんも中学生の頃いじめられた経験やいじめた経験を話してくれた。ぼくの最大の味方がいちばん近い所に居るのが分かった。安心した」。

それ以来、自分の経験を風の舎に来る人たちにも話すようになった。とりわけ長崎ウエスレヤン大学のコミュニティサービスの学生たちに話すことが多かった。その中には不登校経験のある学生たちも居た。彼らと話し合った時のこと、ぽつりと呟いた。「今日は光が見えた」「と言うと?」「ぼくと同じような辛い経験をした人が他にも居る、ぼくだけじゃないと分かって、ほっとした」。年末、風の舎を出る別れ際に、「2015年には、ぼく変わります」と言った。その言葉のとおり、3学期になると少しずつ登校できるようになり、学習室で2時間ほど過ごして、風の舎に帰ってくるという毎日になった。そして、ある日、予想しなかったような発言。

「ぼくをいじめた相手にあやまってほしい、と担任の先生に訴えた。もやもやした気持ちをすっきりさせて2年生になりたい」。

こうして3月20日金曜日、両方の担任の立会いのもとに二人は話し合い、それぞれの気持ちを出し合った。前日は不安でいっぱいだったが、当日はすっきりした表情で風の舎に戻ってきた。そしてこの日がK君の風の舎卒業の日になった。「来週の月曜日は5時間目まで学校に居るので風の舎に来ません」。これが「卒業のことば」であった。

なお、学校とは少年センターを介して連絡会を毎月開き、担任、学年主任、校長と風の舎との間で、一方は教育の立場から他方はケアの立場から意見を交換し、K君への対応について考え合った。



「風の舎」を訪れた韓進さんと共にカメラの前に立つN.Kさん(左端)

学生たちが経験した「風の舎」

2014年度の長崎ウエスレヤン大学コミュニティサービス・プログラムで33名の学生が「風の舎」のピアサポート活動に参加しました。その中から4名の学生の感想を紹介します。

人としゃべること自体が新鮮だった

社会福祉学科1年 平山修二

私が風の舎でやってきたことは何と名状していいかわからない、強いて名前をつけるとするならばそれは「交流」であろうか。活動内容はお茶とお菓子をいただき、風の舎を訪れた方々とおしゃべりをするというのがほとんどだった。これだけ聞くとただ怠けているだけではないかと思われるかもしれないが、この風の舎での活動は、他の場所ではできない、かけがえのない経験、学習だった。私はもともと寡黙な方であまり人としゃべらず生活してきた。大学の授業も積極的に人と関わろうとしない限り人としゃべる必要もないし、大学でもあまり人を関わらなかった。だから、そもそも人としゃべるということ自体が私には新鮮だった。風の舎には身体に障がいを持つかた、心に病を持つかた、悩みを抱えているかたなど、いろいろなかたが訪れていて、その一人一人が違う考え、違う思いを持っていて、それを直接聞くことができ、こんな考え方もあるのかと、自分自身の考えを見つめなおすことができた。人生のなかで本当に必要な学習をこの風の舎で行えたと思う。

居場所を作りたい

経済政策学科3年 一ノ瀬 翔太

私がこの一年間、風の舎の活動を通して考えたことは、人の居場所というものは当たり前のようにあるものではなく、自分たちが作っていかなければならないということです。私はこの活動を通して、人と人とのつながりがあること、支えあうことの大切さを認識するとともに、ある空間、時間を誰かと共有したいと思うことの重要性を知ることができました。それを教えてくれたのは、風の舎に通っていた不登校の中学生でした。彼は自分の居場所として風の舎に通い、その時その時に訪れる人たちとの会話を楽しんでいました。前を向いて、現状と向き合っている、その姿がかつて不登校であった時期の私にも見せたいほど輝いているように見えました。そんな居場所を自分も作っていきたいと考えさせられた場所、それが風の舎でした。

気持ちをまっすぐに受け止めてくれる環境

社会福祉学科1年 花田 萌

後期は特にKくんとの交流が一番印象に残っています。PさんとKくん、わたしたちで一つのテーブルでお話をしたときがありました。その時、Kくんが「いじめてくる人たちのことを死んじゃえばいいのと思う時がある」と言っていました。その言葉にPさんが「それを本人の前で言うのはよくないことだけど、風の舎では言いたいことは思う存分はきだしなさい」とおっしゃいました。私はその言葉を聞いて、改めて風の舎は悩みがある人の気持ちを素直にまっすぐに受け止めてくれる環境なのだと感じるとともに親近感がわきました。

卒論で取り上げられた「風の舎」

2013年、2014年の2年間にわたりコミュニティサービスプログラムで風の舎の活動に参加した井原歩さんは自分のうつ病の経験を踏まえて

「うつ病当事者が求めるサポート～風の舎の試みを通して」という卒業論文を作成しました。彼女はその論文でうつ病から回復してきた転機の一つとして風の舎の存在を挙げています。「きっと治るという気持ちが一生治らないのかもしれないという気持ちに変わって」いき、「家にも学校にも居場所がない」と感じていたある日、彼女は思い切って風の舎を訪れました。その一節を紹介します。

大学帰りに寄ったという雰囲気、風の舎の玄関を開けた。玄関を開けるのには勇気がいったが、「いらっしゃい」と笑顔で迎えられ、ほんの少しだけホッとした。この風の舎の存在が2つ目の転機のきっかけとなる。

風の舎には、様々な人が出入りする。例えばうつ病、統合失調症、身体障害、不登校、その他諸々の疾病や障害を抱えた人々。その家族や友人、知人。風の舎の周辺に住んでいる近隣の人々などが挙げられる。

風の舎は、その日行うプログラムが決まっているわけではない。それぞれが楽なように過ごすのだ。ある人は昼寝をし、ある人は本を読み、ある人はお茶を飲みながら談笑する。時には相談しあったり、情報交換をしあったりする。そのような場所である。

だからこそ、私はこの風の舎がとても居心地のいい場所に感じられた。

時々風の舎に顔を出すようになったことで、様々な障害を抱えた人たちと話をする機会が増えた。

その人たちの体験を聞くと、自分だけが苦しいのではないのだとホッとすることができた。

自分の病気と向き合うことや、薬を上手に使うこと、ストレス解消法など、教えてもらう中で、私は自分の気持ちに変化してきていることに気づいた。「完治させなければと思っていたけれど、別に躍起になって直さなくてもいいのかもしれない。大切なのは、自分で自分を追い詰めないこと。病気を自分でコントロールする力を身につけることだ」と感じるようになっていた。

社会福祉学科4年 井原 歩



その1：風の舎でのピアカウンセリング

立野 雄三

まちなか相談室風の舎で、ピアカウンセリングを担当しています、立野雄三です。
私が風の舎で活動させて頂くようになってから、この6月で3年が経ちました。
3年間はあっという間に過ぎました。

私がピアカウンセリングを活かしたピアサポートが出来る場所を探していた時に風の舎の母体であるウエスレヤンコミュニティカレッジの理事長である内村さんからお誘い頂いたのが全ての始まりでした。まずは毎週木曜日に風の舎で様々な方のお話を聴くことから始めました。それまで私自身が触れたことがないような経験をされている方々や生活の中で様々な思いを抱えている方々のお話を聴かせて頂くことで、初めのうちは戸惑いながらも、人は誰でも沢山の思いがあり、日頃ためている思いを出す場所が必要なのだと感じました。

そして、その年の冬に入る前ぐらいからピアカウンセリングを活かした障がいがある仲間の自立支援が始まりました。そうこうしているうちに2年目の冬を迎え、もっと沢山のの人にピアカウンセリングの事を知って欲しいという私の思いに共感してくれた心強い二人の仲間と共に、ピアカウンセリング公開セミナーを沢山の人の協力を頂いて開催しました。

そのセミナーをきっかけに次年度からは年3回のセミナーを開催しています。さらにピアカウンセリングを応用し、様々なテーマに取り組むピアカウンセリングサポートグループNENDO(ねんど)を毎月第3火曜日に開催するようになりました。こうして私は今も様々な方の手を借りながら活動をさせて頂いています。

これまでの社会の中では障がいの有無に代表されるように様々な壁を作り、人間の分離を多く行ってきたと私は考えます。しかし今からは分離ではなく、共生の社会を作っていかなければならないのではないかと考えます。それをコミュニティカレッジの事業や風の舎では少しずつ実現していると私は感じています。それぞれの垣根を越えて何かを成し遂げることは上手くいくことばかりではないし、簡単ではありません。しかし多くの方が試行錯誤、創意工夫しながら前に進んでいます。

ピアカウンセリングに関しても、障がいのある当事者同士が行うピアサポートの一つの方法という基本に沿いながら、しかしもう一方では障がいの有無にかかわらず、誰もが気持ちを聴き合って出し合って、互いに仲間として支え合う方法の一つとして活用できないかと試みながら活動を行っています。

最後にいつも私を支えて下さっている内村さん、そしてボランティアスタッフの皆さん、沢山の仲間達に感謝の言葉を書いて文章を閉めたいと思います。

「皆さんいつも私を様々な形で支えて下さってありがとうございます。
本当にありがたい気持ちでいっぱいです。これからもどうぞよろしくお願いします。」



ピアカウンセリング公開セミナーを
主宰する立野さん(中央)



2015年度
ピアカウンセリング
公開セミナーの様子

2014年4月26日
9月23日
2015年3月15日
5月23日
8月30日 に開催

その2：リスタート

富永 遼子

働くことは容易ではない。
それを痛感したわたしは、そういう意味では一般就労をどこかで諦めていた。
就労移行支援事業所で作業訓練をしたり、ハローワークに通ったり、企業での実習をおこなったりしたが、ことごとく失敗に終わった。

ある日、転職は訪れた。パートの仕事が決まったのだ。清掃を請け負い、1日2時間の仕事に励んだ。
しかし、もっとたくさん働きたいという想いは日増しに強くなり、
障害者合同面接会に行きダブルワークを目指したりした。
そこから縁あって、今の職場（就労支援事業所「太陽工房」）での
ワーカーの仕事に落ち着いた。ほんの数か月前の話だ。
精神障害を持っていてもワーカーの仕事をするのがわたしの夢だった。
決まったときには当然、飛び上がるほど歓喜した。抱負もある。
今は仕事を覚えるので精いっぱいだが、もっと職員や利用者と話が
できるようになりたいし、特に利用者とは支援なんておこがましい言葉を使わないでもいい関係を作りたい。また、わたし自身が障害を持っていると
いうことを隠さないことで立場をこえた助け合いができるのではと思う。
あとはサポーターに頼りながらも、弱音を吐いていけたらいい。

つらい時につらいとも言えないほど切羽詰まると、仕事が長続きしないと
就労移行支援事業所で学んだ経験もある。
奮発して電動自転車を買ったので、40分の通勤も快適だ。
仕事は1日6時間だが、ゆくゆくはフルタイムを目指している。
私の夢はまだ終わらない。



「べてるin諫早2014」で
発題する富永さん

～ ある出会い ～

3月末「風の舎」とゆかりのあったヘルパーTさんが食道ガンでお亡くなりになりました。

最期の日々、病と向き合い、死と向きあいながら、介護者としての生きかたを

全うされた姿は、Tさんから長く介助を受けた人たちや、

同じヘルパーステーションの仲間のうちに深く刻まれています。

「風の舎」でTさんに会った私たちも、その立居振舞に感銘を覚えていました。

8月23日の第47回諫早大村生と死を考える会で

「あるヘルパーの生きざまに学ぶ」と題して、木下裕司さん、

立野雄三さん、山崎道春さんにTさんをしのんでお話いただきました。



スタッフの声

○同じ悩む者同士として

月曜日スタッフ 六郷 美和

この1年もまた涙あり、笑いあり、「異なるものが、異なるままに支えあう」風の舎でした。
世代を越えていろいろな方との出会いがありました。
とりわけ、この春卒業していった二人の不登校生からは、自分の気持ちを誠意をもって伝えることの大切さや、自分の苦しみから逃げずに向きあう勇気を学びました。
不登校生を抱える家族の方々と話をしながら自分の経験を思い出し、それが持つ意味をあらためてかみしめました。
颯志の不登校の経験がなかったら今の私はありません。
同じ悩むもの同士として息子と一緒に自分がどう生きるかを考えることで自分の生きかたが変わりました。
風の舎を訪れるお父さん、お母さんにもそんな変化のきざしが感じられます。
風の舎での出会いによって私自身が考える種をたくさん得られたことに、とても感謝しています。



○No smile is me, a smile is me

火曜日スタッフ 山口 香菜実

「どうしたらいいのだろう…」

風の舎のボランティアスタッフになって3年が経ちました。
1年目はただただ楽しくて「今日は何して遊ぼうかな～」とわくわくしていました。
2年目は一人一人の悩みに対し一緒に何ができるのか考える日々。
そして3年目である2014年度は自分の力の無さを痛感する1年でした。
気持ちに余裕がなく、表情がきつくなっていく、どんどん嫌な自分になっていく。
笑顔でいることは決して普通なことではなく特別なことなのだと思います。
それは今まで私がどれだけ周囲の人、環境に恵まれていたのかに気付かされた瞬間でもありました。と、同時にここに訪れる人にとって「笑顔でいる」ことの意味を考えるようになりました。『笑う門には福きたる』というように笑顔でいれば自然と気持ちが明るくなるのだと思っていた私。しかし笑顔でいることがこんなにも苦しくて辛くてどうしようもないこともあるなんて。
無表情でいることが楽なときもあるなんて。
「笑顔でいたくない時は無表情でok☆」「笑顔でいたい時に笑顔でいれる」
そんな場所(存在)でありたいなあと思います。



○ただ居るだけの私

木曜日スタッフ 松尾 万喜

シャリシャリと車椅子の音がすると、「おはようございま〜す」の声が出て昇降機の準備。一気に木曜日の風が吹き始めます。
それから当事者同士の自立支援、ピアカウンセリングです。
約1時間で終わります。終わった後も熱気の余韻を感じます。
前後して、相談やコミュニティサービスの学生の活動。
訪問する方、ヘルパーの方々、それぞれがおしゃべりしたり、ある時は当事者研究になったりしながら時が流れます。
私もスタッフとして1年半が経過しました。閉ざした殻を破り、心をほぐされていく相談者や学生の姿に、ただいるだけの私が一番癒されています。



○行先の分からなさを楽しみながら

金曜日スタッフ 松藤 祐子

風の舎のスタッフになって今年度で早3年目。
Pさん、内田さんをはじめ、周りの方々に甘えながら、のんびりとただ居だけの私でしたが、4月から社会福祉士を目指し通信科で勉強を始めました。社会福祉士という仕事を知ったのは約5年前でしたが、当時の正直な印象は「はっきりしない国家資格だな…」でした。
そんな気持ちから挑戦してみようという気持ちに変化してきたきっかけは風の舎での活動でした。風の舎には生き辛さや痛みを抱えた方たちが来られます。苦しみながら少しずつ自分の問題を解消して新たな道を行く方、問題は解決しないけれど解決しないまま生きていく方。どこにも正解はない。それぞれの生き方や姿を見せていただける時間でした。それは今まで見たこともない考えたこともないものに触れ続ける時間でもありました。その中で自分はこれまで良いのかという思いが湧いてきたように思います。今の私よりももう少し広く物事を見れる、関われる自分になりたい。この気持ちが今回社会福祉士を目指す一番の動機になりました。一歩踏み出した現実目の前のレポートに追われる毎日です。この先、社会福祉士を目指す自分が何を見るのか、何につながっていくのか、それは今はわかりません。けれど、その分からなさをどこか楽しみながら、自分もまた苦しみを持つ一人の人としての目は決して失わないように進んでいきたいと思います。目指すは弱くある社会福祉士。まだまだ皆様にはご迷惑をおかけします。よろしくお願いします。



「風の舎」をはじめとする本NPOの活動は
皆様のご協力・ご寄付によって支えられています。

ご寄付いただいた方々のお名前を記して御礼申し上げます。

2015年6月20日現在 ※敬称略(50音順)

<2011年度>

個人: 今村泰子、内村優、益富美津代、城谷安津子、原口健治、開浩一、山住恵子、吉竹明子
団体: 長崎ウエスレヤン大学社会福祉学科(中野)

<2012年度>

個人: 今村泰子、伊賀崎正子、内村公義、内村放、城戸修一、小山キミエ、中尾勘一郎、中川幸久、野口浩介、原口健治、山口ナヲエ、山口ハツ子、山田則子、吉田博子、六郷美和
団体: かわせみ会、クライストコミュニティ長崎ツアー、にこりば(代表 城谷・牟田)

<2013年度>

個人: 安達雅子、今村泰子、伊賀崎正子、内村公義、城谷安津子、福留彌生、松尾万喜、宮本峻光、山口明、山口ハツ子、山崎雅幸、山住恵子、吉田恵利子、吉田博子、吉野朝子
団体: かわせみの会

<2014年度>

個人: 今村泰子、内村公義、大塚俊博、斉藤敦子、古本由美子、松尾亜希子、松尾万喜、松本八重子、村島和明、村島利恵子、山住恵子、吉田勝博、吉田博子
団体: 北小クラブ(学童保育)、ひとみ実行委員会、ピアコネクトおおむら

<2015年度>

個人: 石川サヨ子、伊藤文人
団体: ピアサポートクラブNENDO参加者有志一同

諫早 大村 生と死を考える会

2014年4月20日(第39回)



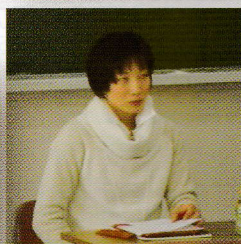
2014年6月15日(第40回)



2014年8月24日(第41回)



2014年10月25日(第42回)



2015年1月18日
(第43回)



2015年2月15日(第44回)



2015年4月19日(第45回)



2015年6月21日(第46回)



2015年8月23日(第47回)



第39回 発つ人の思い 送る人の想い

松本 八重子さん

第40回 対談 がんと向き合う

桑原 清弘さん ・ 中野 伸彦さん

第41回 緩和ケアについてー理念と実際

有森 葉子さん

第42回 医療福祉市民セミナー 地域に豊かなケアの文化を

竹熊 千晶さん ・ 前田 真由美さん ・ 佐藤 快信さん

第43回 リビングライブラリー「母と子～その遠さと近さ」

岩崎 茜さん ・ 松藤 祐子さん

第44回 300歳の放談 老いること 死ぬこと 生きること

高柳 康雄さん ・ 泉田 昌俊さん ・ 山口 ハツ子さん ・ 内村 公義さん

第45回 最期まで寄り添って～市民後見人として

淵上 公子さん ・ 島田 美佐代さん

第46回 認知症の人のケアについて

石田 小百合さん

第47回 病と向きあう 死と向きあう ～あるヘルパーの生きざまに学ぶ～

木下 裕司さん ・ 立野 雄三さん ・ 山崎 道春さん

医療系学生と学ぶ死生学 in 上五島

2014年9月6・7日

広島大学国際医療研究会COCOの学生12名が「オハナの家」、上五島病院を中心に
町民と共に死と生について考え合いました。



「オハナの家」でCOCOのみなさん

べてる in 諫早2014

2014年11月23日



【発題者】
吉田勝博さん 古本由美子さん



【発題者】
田中幸一郎さん 富永遼子さん



【べてるの家のみなさん】
柳 一茂さん
秋山里子さん
高田大志さん (PSW)



【指定発言者】 大塚俊弘さん



「第23回精神障がい者&家族懇談会」
を兼ねた交流会の参加者

※精神障がい者&家族懇談会は毎月1回開催



あとがき

2014年度中に出すはずだった「風のたより」、
遅れに遅れて2015年度も半分過ぎてしまいました。

本当に申し訳ありません。

会員の皆様にも、原稿を寄せて下さった方々にもお赦しを乞うばかりです。

今号は「風の舎」に集う人たちの声を中心に編集しました。

「風の舎」で話していると、

さまざまな生き辛さを抱える人たちの顔から、時折、笑みがこぼれます。

その笑みを見ていると、いろんな花が一斉にひらいたように感じられます。

まさに「百花斉放」です。

表紙を飾るのは「風の舎」を訪れた赤ちゃんたちの花の笑顔です。

カラー印刷でお届けします。

内村 公義

※ホームページもご覧ください。「NPOウエスレヤン」で検索